



筑紫女学園大学リポジット

The Achievements of YOSHIDA Masaharu as a Pioneer in Archaeology and His Experiences in West Asia during the Meiji Era

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/441

明治期先覚者吉田正春とその事績－「考古学」および「西アジア」の視点より－

大 津 忠 彦

The Achievements of YOSHIDA Masaharu as a Pioneer in Archaeology and His Experiences in West Asia during the Meiji Era

Tadahiko OHTSU

はじめに

西アジア世界の歴史、風土、文化に関連して、とりわけイランの地が近代日本へ認知されてきた経緯を調べ考察すると、研究史上、考古学分野から見てもその事績に注視すべきと考えられる人物の存在がある。そのうちのひとり吉田正春（1852年4月19日～1921年1月18日、図1）について、ここに取り纏めておきたい。



図1.吉田正春肖像

吉田正春の関歴については、以下の資料に拠り窺い知ることができる：

- ① 寺石正路著『土佐偉人伝』（1976年、歴史図書社；同著者による同名の著書は1914年発行の澤本書店版がある）
- ② 高知県人名事典編集委員会編『高知県人名事典』（1971年、高知市民図書館発行）
- ③ 墓碑（1937年1月18日建立、図2）銘文

これらのうち③は、谷中霊園（東京都台東区谷中一丁目、乙8号5側）に有り、すでに紹介されたところがある（萩原1967年、大津1999年）。碑文末尾「昭和十二年一月十八日 施主吉田元興建之」に依れば、これは正春十七回忌に際し、嗣子元興（1905～1964年）が建立したものであり、その銘文は吉田正春の事績を簡潔に紹介し、具体的である。まずは資料として、ここにあらためて転写こととする。

I. 吉田正春略歴一墓碑銘文より一

【碑文】

君諱正春字俶載号静海又曆園土藩執政東洋子也妣後藤氏為伯爵象二郎叔母東洋有才略輔佐藩政多所建立為小人害而逝君少孤依象二郎發憤修學通和漢洋尤長詩文抱經綸之才年二十一擢審判官西鄉隆盛反拋官応之与板垣退助唱道民権鼓舞民心隆盛敗為高島炭礦參務往来清国幫弁礦務頗有成功既而擢外務書記官歴遊欧美考查制度伊藤公博文延為參事院議官帶同遊欧西考查憲政最与有力焉為岩倉右大臣具視幕賓与柳原伯爵前光共抑制薩長權勢為其所惡退与象二郎俱創開大同團結呼号民権天下風靡与星亨尾崎行雄等被逐京外亡幾遭大赦而歸仕通信參事官唱建海運鐵路政策次第興挙与当路不合致仕時年四十六不復関世事所著有悞翠樓詩文波士巡遊記自治原義等數十卷藏家大正十年一月十八日年六十九以歿贈從五位葬谷中墓域

配宮崎氏子元興元興以全与父有交乞表其墓乃為敍梗概云

昭和十二年一月正四位細田謙撰

昭和十二年一月十八日

施主吉田元興建之

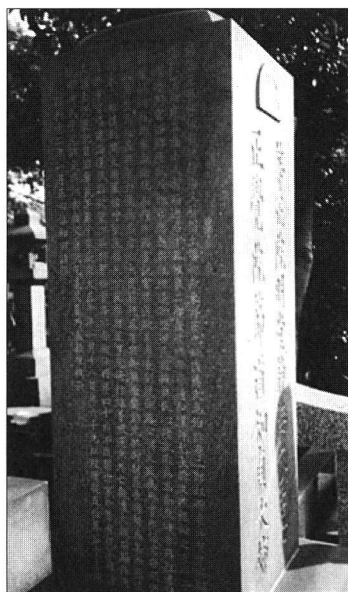


図2.吉田正春の墓石と碑文

【読み下し、ならびに注】

君、諱は正春、字は俶載、号は静海又は曆園、土（佐）藩執政東洋^{注1}の子也。妣後藤氏は、伯爵象二郎^{注2}の叔母なり。東洋才略ありて藩政を輔佐し多所建立するも、小人の為に害せられ逝く。君、少にして孤たれば、象二郎を依り、發憤修学す。学は和・漢・洋に通じ、尤も詩文に長ず。經綸の才を抱き、年二十一にて審判官に擢せらる。西鄉隆盛の反くや^{注3}、官を^{なげう}拋ちて之に応じ、板垣退助とともに民権を唱道して民心を鼓舞す。隆盛敗るや、高島炭礦^{注4}參務と為りて、清国に往来す。礦務に幫弁し頗る成功有れば、既にして外務書記官に擢せらる。欧・美（米）を歴遊し、制度を考查す。伊藤公博文、延いて參事院議官と為し、帶同して欧西に遊び、憲政を考察せしむるに、最も^{あずか}与つて力あり。岩倉右大臣具視^{ばく}の幕賓^{ひん}と為り、柳原伯爵前光とともに、薩・長の權勢を抑制せんとし、その惡むところとなり退く。象二郎とともに、創開大

同團結を呼号す。民権の天下に風靡するや、星亨・尾崎行雄等とともに京外に逐せられて亡るるも、幾に^{とき}大赦に遭いて通信參事官に歸仕す。海運鐵路政策を建つるを唱え、次第を興挙するも当路と合せず、致仕^{ちし}す。時に年四十六。復び世事に関わらず。著すところ『悞翠樓詩文』・『波士巡遊記』・『自治原義』等數十卷有りて、家に藏す。大正十年一月十八日、年六十九、

歿して以て従五位を贈らる。谷中墓域に葬す。

配（配偶者）宮崎氏、子は元興。元興父と交有りて全うせるを以て、その墓に表を乞えば、乃ち為に梗概を叙す。

昭和十二年一月、正四位細田謙撰

昭和十二年一月十八日

施主、吉田元興之を建つ。

注1 吉田東洋（1816～1862年）：幕末の高知藩士。名は正秋。1853年（嘉永6）藩主山内豊信（容堂）に登用されて藩政改革を推進。一時蟄居。藩政復帰後は中堅家臣層から成る「新おこぜ組」を基盤に上士層の守旧派、下士層の勤王党と対立。城からの帰途、勤王黨員に暗殺される。

注2 後藤象二郎（1838～1897年）：政治家。土佐藩士。大政奉還運動を起し、明治維新後、参議。征韓論政変で下野。板垣・副島・江藤らと民撰議院設立を建白。自由党に参加。大同団結を提唱。のち逋相・農商務相。伯爵。

注3 征韓論政変：1873年（明治6）におきた西郷隆盛の朝鮮遣使への賛否をめぐる政変。西郷・板垣退助・江藤新平らは遣使を主張したが、岩倉具視・大久保利通・木戸孝允らは朝鮮との戦争につながるとして内治優先の立場よりこれに反対。結局、前者の意見が敗れ、西郷らは下野し、政府は分裂。明治6年政変。

注4 高島炭田：長崎県南西部、長崎半島西岸沖の高島・端島はしまの炭田。海底炭田で炭質優良。1867年（慶応3）日本で最初に洋式採炭法を採用。端島は1974年、高島は86年に閉山。

（注1～4は『広辞苑』第五版[岩波書店]より）

II. 吉田正春と考古学との接点

碑文内容は、若干の相違（例えば上京時年齢や享年）があるものの、前記①、②と相補する。碑文が刻み伝える「学通和漢洋（学は和・漢・洋に通じ）」という俊才ぶりは、「年少にして藩校致道館に學ぶ明治元年十五歳の時江戸に赴き英國領事の家を寓し英語並法律を學び上達する所あり（前記②）」によって修得したと推察されるが、具体的にその師あるいは学統を特定するには未だ至っていない。しかし、当時横浜では、日本語に堪能な外交官として知られた英国人アーネスト・サトウ（Ernest M. Satow, 1843～1929年）や、シーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796～1866年）の長子アレクサンダー（Alexander, 1846～1911年）がその職務に就いていたので、あるいは彼らとの交誼の可能性を考えてよいかもしれない。これについては、後に触れる吉田のペルシア訪問同行者のひとり横山孫一郎（1848～1911年）のケースも示唆するところが有ると考えられるが、これについては稿を改めたい。

考古学に関しては、当時、オーストリア公使館書記官を務めたシーボルトの次男ハインリッ

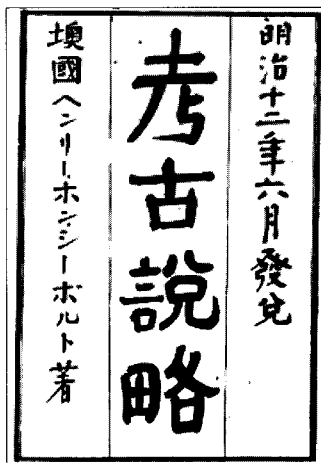


図3.『考古説略』扉

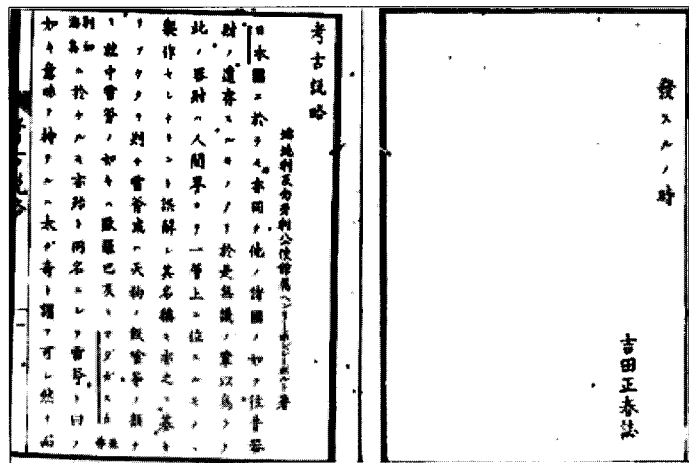


図4.『考古説略』緒言末尾(右)と同本編初頁(左)

ヒ (Heinrich, 1852~1908年) による著書『Note on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age』(1878年) の邦訳書『考古説略』(1879年、図3、4) に、その緒言を寄せているのが吉田正春であることは、接点のひとつとして挙げてよいであろう。

「考古学は欧州学課の一部にしてその課をなお二つに区別しその一部を事物考古学またその一部を風俗考古学と称す 考古の志ある人の居室に入れば……」にはじまるこの緒言からは、今日に連なる近代的考古学調査研究の学史に照らせば、吉田正春の考古学への精通ぶりの卓抜した早さを窺い知ることができる。すなわち、我が国における近代考古学調査の嚆矢といわれる、かのモース (Edward Sylvester Morse, 1838~1925年) による大森貝塚遺跡 (東京都品川区大井~大田区山王) の発掘調査活動が1877 (明治10) 年、そしてその調査報告書『Shell Mounds of Omori』(Memoirs of Science Department, University of Tokio, Japan, vol. 1) の刊行は1879 (明治11) 年であったから、前記「緒言」は、まさに吉田の先進性、博学の程を物語っているといえよう。

また、この「緒言」なかほどに見られる記載事項「吾友ヘンリー、ホン、シーボルト君は嚮に長崎に寓し名誉を当世に伝えられたるホンシイボルト先生の次男にして博物の学旨を先生の遺志として之を研究せらるや余も兎角の頃より披襟の交ありて其嗜古の癖も復た相尚しかりき」は、前述のことと相俟って、たしかに同書の翻訳が吉田によってなされた可能性を強く示唆する。しかし、この翻訳者同定については、「考古学」という用語自体の初出問題共々、筆者はまだ吉田を有望な可能性あるひとりとする段階にとどめおきたい。

1880年に「最近の出版物一日本考古学に関する新刊一」のひとつとして採り上げられたハインリッヒ著『Note on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age』(1878年) に対するモースの評価には、「さまざまな表題のもとで興味深い事実が数多くあつかわれており、この本は、日本の石器についての我々の乏しい知識に貢献するところが大きい」、「日本考古学の理解にひじょうに優れた貢献を果すもの、とみなさなければならない」(近藤・

佐原1983年）とある。ハインリッヒもまた、1877年、大森貝塚遺跡の発掘を目指していたとも言われ（近藤・佐原同前）、ここに研究者間の思惑の交錯が設定されるかもしれないが、「…モースは報告書の準備をすすめている。海外の文献をよみ、神田孝平・蜷川式胤ほかの日本の好古家の意見を求めており、それらの人びとの名を報告書の序文につらねている。いっぽう、ドイツのエドムンド・ナウマン、ハインリヒ・シーボルト、イギリスのジョン・ミルン等、ライバルだった在日外人考古学研究者の名はみられないから、報告書準備にあたっては彼らとの交流はなかったのだろう」（近藤・佐原同前）との推察は、予断を許さないと思われる（磯野1987年、とくに129頁）。

吉田正春に、ハインリッヒ・シーボルトを介して、モース自身あるいはモースの事績への繋がりをはたして見出せるのか。大森貝塚発掘調査の成就に到ったモース日本行の動因のひとつは、幕末「黒船」後に行われた日本沿海調査の結果が、モースの専攻する貝類研究にとって絶好のフィールドであることを示していたからだといわれている（磯野同前）。それは19世紀後半の世界情勢変革の大きなうねりのなかで、様々の因果があたかも玉突き現象的に日本へ到来し、いくつかのいわばそれら「外来種」が日本の土壌に着床開花した結果とみなされよう。しかし学問分野のいくつかにおいては、日本の土壌がすでに充分に醸成し、目的に適合し、また育てる技量を備えていたればこそ可能となったのであり、吉田正春もその役割りを先覚的に担い得たひとりに挙げられなければならないと思われる。

Ⅲ. 吉田正春と西アジア旧蹟

i. 遣波使節団

吉田正春は、1880（明治13）年に明治新政府派遣の公式使節団の一員として、カージャール朝ペルシア（1796～1925年）を訪問し、翌年トルコ経由で帰朝した。先述の碑文中に著書名のひとつとして挙がる『波斯巡遊記』はこの事績に関わる。ただし、吉田の西アジア行に関する著作は『回疆探險波斯之旅』（1894年、図5）として伝わるだけであり、同書緒言中「上部は「波斯の旅」と名づけ、下部は「土耳其の旅」と名づく、二部同時に併刊せんよりは上下部に分つ方こそ讀者をして倦まざらしめざるべしとは、博文館主人の注意なり」、あるいは同書奥付前頁の予報から、続編として『回疆探險土耳其の旅』が当初出版予定としてあったらしいことはたしかに窺えるものの、これは未刊に終わってしまったようである。



図5.『回疆探險波斯之旅』表紙

1880年の遣波使節団については、これまでしばしばその論考課題とされ（田保橋1923年、中岡1985年、山中1993年）、筆者もまたかつて論じたところがある（大津1998年、1999年）。日本人がはじめて西アジアの地を、経由地としてではなく、あ

くまでも目的地として訪問し、実際に踏査し、異文化を実体験したこと、そしてその実録が当事者の記述として詳細に残ることからこの事績は注視に値するのである。

ii. 使節団構成員

この遣波使節団の発端ならびに構成員について、吉田は次のように記している：「其当時波斯王^{注1}が彼の有名なる欧羅巴旅行を試みたる第二期の帰途に於て魯都聖彼得堡に滞在せし時、我が帝国の全権公使榎本^{注2}子爵及其時の書記官西徳次郎氏（現時の全権公使）が波斯王に謁見されし際、交通の希望は彼の王旨なりしとて伝へられたるが起因となれり、余は折りしも我が外交官の末班に列なり居りし故に、時の外務卿井上伯爵^{注3}の訓令を帯び、陸軍大尉古川宣誉（現時の中佐）と共に五人の商人（其時の商人は横山孫一郎土田政次郎浅岡岩太郎等の諸氏外二名なりし）を随伴して此行を為すに至りし、（吉田1894年）」。

注1 カージャール朝ペルシア王ナーセロッディーン・シャー（1848～96年）

注2 榎本武揚（1836～1908年）：政治家。通称、釜次郎。号、梁川。江戸生れの幕臣。長崎の海軍伝習所に学び、オランダに留学、帰国して海軍副総裁。戊辰戦争で、箱館五稜郭に拠って官軍に抗したが間もなく降伏。のち駐露公使としてロシアと樺太・千島交換条約を結ぶ。諸大臣を歴任。子爵。

注3 井上馨（1835～1915年）：政治家。通称、聞多もんた。号は世外。長州藩士。討幕運動に参加。維新後、政府の中心人物の一人となり、要職を歴任。外相として条約改正を試みるが挫折。財政・経済にも力をふるう。伊藤博文の盟友。晩年元老。侯爵。

（注2、3は『広辞苑』第五版[岩波書店]より）

文中の「外二名」の商人とは、同使節団が当時最新鋭の戦艦比叡（1878年竣工、2,284トン、艦長は伊東祐亨海軍中佐（当時））で品川を抜錨（1880年4月6日）当日付「東京横浜毎日新聞（第2,799号）」記事に語るところがある：「横浜花咲町なる後藤省三郎氏は七宝製造のことに就き多年経験により其術の秘奥を極め方今皇国にて産出する七宝中着色蓄様等能く内外人の嗜好に適するが為め本邦人は固より欧米人も競ふて之を購求し其地位殆ど最高点を占めたりと云ふも敢て不可なきが如し然るに今般我政府に於ては波斯国と貿易を試みんが為本邦の産物数品を齎らし委員を同国に派遣し以て其状況を探らしめらるゝにより後藤猪太郎（省三郎氏の義弟）三河屋濤二郎の二氏を委員とし大倉組なる横山孫一郎氏を其取締りとなし七宝及竹細工類は後藤猪太郎氏金属鉤の類は三河屋濤二郎氏又小道具刀剣類は大倉組にて担当をし又此渡航の為め政府よりは比叡艦を差廻さるゝに付今六日午前六時を以て品川湾を解纜をすと云ふ本邦の商人が未だ嘗て貿易事業の端緒を開かざる波斯地方に向ひ斯く二三氏が（以下省略、原文中の旧字は改変、ルビは省略）。

以上は古川宣誉（1849～1921年、当時陸軍工兵大尉）の著書『波斯紀行 完』（1891年）所収「日誌之部」の、明治十三年四月五日付記事と相補、比較することができる：「（前略）艦

長伊東海軍中佐祐亨副艦長服部海軍少佐潜蔵及其他各士官ニ会ス（中略）艦中波斯ニ赴ク者余輩三人ノ外尚ホ外務省ヨリ理事官トシテ同省御用掛吉田正春大蔵省商務局ヨリ大倉組商社副長横山孫一郎社員土田政次郎七宝焼磁器商後藤猪太郎小間物商藤田多吉金銀細工物商三河鑄二郎ノ六名アリ（以下省略、本文中の旧字は改変）。

すなわち、将校級艦員を除く使節団構成員は、資料より名前を拾えば、吉田正春、古川宣譽、横山孫一郎、土田政次郎、浅岡岩太郎、後藤猪太郎、三河（屋）濤二郎、藤田多吉となる。このうち「浅岡岩太郎」は吉田の記録中にのみ、同様に「藤田多吉」は古川の記録中にのみ挙がる（なお、「三河（屋）」名の一字は「濤」あるいは「鑄」のいずれかは不詳）。

iii. 吉田らの西アジア遺跡訪問

その1：バビロン行（失敗）の途次にて：クテシフォン遺跡

吉田著『回疆探険波斯之旅』の出版（1894年）は帰朝後10年以上経過後に成ったものであり、それは同行者古川宣譽による著書『波斯紀行 完』（1891年）に後発する。しかしながら、いまだし資料を渉猟すると『東京地學協會報告（Journal of the Tokio Geographical Society）』第3巻第4号（1881年12月8日刊行）所収169～190頁に、「波斯紀行 番寓達都及番須羅紀行 吉田正春述（^{ママ}Travels in Persia, by mr. Yoshida）」の記事を見出すことができる。ちなみに、同誌同巻号所収の「東京地學協會報告録事（^{ママ}Proceedings of the Society）」文末には、「同日吉田正春氏ハ波斯記行ヲ演説シ島弘毅氏ハ清國運河紀行福島安正氏ハ多倫諸爾紀行第二回ヲ贈ラル古川宣譽氏ハ波斯事情ヲ演説スルノ約アリシカ事故アリテ缺席ス」とある。また、当日参加者23名の氏名列記中には、先の碑文中登場する人物のうち「星亨^{注*}」の名が認められる（注* 星亨、1850～1901年：政党政治家。江戸生れ。自由民権運動に参加し、投獄。自由党の領袖。第2代衆議院議長。駐米公使。憲政党の旧自由党系を率いて政友会の結成に参加。通相・東京市会議長などを歴任。伊庭想太郎に刺殺された。この件『広辞苑』第五版[岩波書店]より）。

これは吉田帰朝後日浅くしての西アジア体験報告であり、内容は副題にあるごとく「バクダードおよびバスラ紀行」であるが、実のところ、これは旅程上余分の踏査敢行であった。というのも、派遣団一行は、途中より先行することになる吉田・横山隊に、古川らが合流した日の翌日1880年7月11日つまりブシェール入港をもってペルシア公式入国となるのである。すなわち、後続隊到着までの日時を活用しての、6月21日から7月10日ブシェール帰港までの「バクダードおよびバスラ紀行」であったのである。

この報文は、吉田・横山二名が、通訳にあたるインド人ラムチャンダラを伴い、クウェートを經由し、シャトル・アラブを遡行し、「面部ヲ深く裏ミタル婦人」やウマの密売、兩岸の「デエツ」（ナツメヤシ）の樹蒼を見つつ炎熱を体験した後、バスラに城旧蹟を見た（6月23日）ことよりはじまる。これらの内容は、『回疆探険波斯之旅』第二章「バスラ及びバグダットの道中」の件に呼応する。そして報文中、古代遺跡に関する言及がある。

それはバグダードに至る直前の6月28日のこととして、「此日船行殊ニ遅クシテ夜半ニテゼホンノ旧蹟ヲ経過シ月明ノ中ニ石造ノ門戸荒原ニ聳エタルヲ瞻望シタリ（吉田1881年）」と記されている。この件は「テゼホンは是又名高き古蹟のよし、折から夜間に此地を経過したりしが、月明中に巨大なる希臘風の半月形石門の頽残したる姿を望めり」（吉田1894年）との記載事項に相当する。吉田が「テゼホン」と呼称したこの遺跡は、バグダード南東26kmに位置する「クテシフォン遺跡」（パルティア／サーサーン朝時代）であり、「巨大なる希臘風の半月形石門」とはすなわちシャープールⅠ世（241～272年）、ホスローⅠ世（531～571年）の創・再建と伝わる宮殿址正面観を指すものと判断される。ちなみに、帰路バグダードからバスラをめざす途次にも、再度、吉田はこの遺跡を実見している：「七月四日午前四時バグダッドヲ発ス流ニ従ツテ下ル船最モ疾シテゼホンノ旧蹟ヲ再ビ晴日ノ中ニ望ム石造ノ門戸八月下ノ観ヨリモ大ニシテ傍ニ一古寺ヲ建設セルヲ発覚セリ就テ近視セザリシヲ遺憾トセリ（吉田1881年）」。

吉田らの当初目的「バビロン行」は6月29日晚より敢行された。それはバグダード在住の英国領事の忠告に従い、途次の安全を期して「隊商」に同行するという計画であった：「其夜ハ横山氏ラムチヤンダラ及亞刺比亞ノ案内者一名トトモニ驛背ニ跨リ番寓達都ヲ出デ浩渺昏黒ノ荒原ヲ馳セ一燈ノ光ヲ目的ニ隊商ノ行伍ニ入ラント追駆セリ（吉田1881年）」。

しかしながら、吉田は体調不良をきたし（恐らく熱中症）、横山の提言すなわち「此行実ニ缺クベカラザルノ事ニアラズ巴比倫前面アリト雖モ萬一不虞アラハ大ナル後事業ヲ誤ルベシ（吉田1881年）」、「此の旧蹟に至らんと欲するは何の為めぞ、単に亞刺比亞一部の風俗を観察するに外ならず、探古究奇の為に生を殞する迄の義務はあらざるなり（吉田1894年）」によって、この計画は中断を余儀なくされた。吉田・横山にとって、未体験の酷熱暑（報文によれば屋外は華氏130度、すなわち摂氏54度）、現地食への違和感、蚊・蠅の不快ならびに治安の悪さが断念の因となった。単独強行した末、被害を蒙った「ラムチヤンダラ」のことからすれば、吉田・横山のバビロン行断念は、結果的には、英断ではあった。

筆者のメソポタミア滞在実体験（1978年3月3日～1979年2月11日；1979年4月15日～1979年10月20日）から判断しても、6月下旬から7月上旬にメソポタミア南部を、しかも充分な事前計画・準備（装備）なしに「冒険」するのは、たとえ治安良好下でも極めて危険と云わざるを得ない。その酷暑の程は尋常でないからである。吉田も「釜甌ノ中ニ坐スルノ虚譬ナラザルヲ悟レリ（吉田1881年、7月1日の項）」他はじめ、その凄まじさについては処々に書き留める。その地の炎暑の様は、かつて古代ギリシアの地理学者ストラボン（紀元前64頃～後21年頃）が、「とにかく、真昼時の太陽が暑い盛りには、とかげや蛇が市中の通りを渡り切らないうちに道の中ほどで焼け死んでしまう（飯尾都人訳1994年）」と記載したほどに凄まじい。ちなみに、地球上での最高気温公式記録は、これまでのところ1921年7月8日のバスラ（イラク）における摂氏58.8度である。

その2：ペルセポリスおよびその周辺の諸遺跡

吉田・横山らがバビロン遺跡訪問（失敗）よりブシェールへ戻り着き、他の団員共々いよいよ目的地テヘラーンへ行を開始したのは7月25日であった。そして一行は、幾多の辛酸を嘗めつつも、陸路を順調に進み行き、8月2日にシーラーズに到着。そこにて爾後の旅程について、吉田に一考が起る：「此地に駐り居る中に回教の断食季^{註1}に出遇ひたれば、如何に急行して丁蘭に達する^{註2}とも波斯官吏の訪問には極めて不便なるべし、此間にこそペルセポリスの古蹟を吊ふて徐々に歩を進めれば、丁蘭に達するの日は将に断食季の終りなるべしとて、迂路ペルセポリスに入るを企てたりし、（吉田1894年）」。

注1 断食月（ラマダーン月、イスラーム暦9月）。古川の記すところによれば、「此国ハ本月八日ヲ以テ九月一日ト為シ九月中ハ教則に據リ昼間食ヲ断チテ睡眠シ日没ヨリ起テ食ニ就キ経ヲ誦シ夜ヲ以テ昼ニ換ヘ以テ定例トナスト云フ（古川1891年、日誌之部8月7日付）」とある。

注2 吉田らの丁蘭（テヘラーン）入りは9月7日。しかし公式入京は9月10日、そして国王ナーセロディーン・シャー拝謁は9月27日であった。

そして8月11日午後、一行はシーラーズを出立。以後の旅程ならびにいかなる遺跡を踏査したかについては、便宜上、「古川1891年、日誌之部」を援用して辿るべきであろう。なぜならば、吉田の記録文は抒情的表現傾向が強く、時間、場所の経緯を追うには不便であり、また、省略したと判断されるところがしばしばあるのに対し、古川のそれは、もちろん時には私情が混ざるものの、基本的には「時系列」的に坦然と記述が進行されているからである。したがって、これら双方の記録文を併用、相乗させることにより、かなりの臨場感をもって一行の動向を効果的に把握・再現できるところが増大するともいえる。

①ナグシェ・ラジャブ遺跡

8月13日、前日夜中に到着した場所「タクテタウース」の地名の由来になった旧蹟タクテタウース（おそらく当所の烽火台遺構を指すと考えられる）の南に、今日「ナグシェ・ラジャブ」の名で知られる遺跡を訪れている。すなわち「サセニード朝ノシャプール王ノ像アリ馬ニ跨リ巨輪ヲ一騎者ヨリ受クルノ状ナリ（古川1891年、日誌之部8月13日付）」とは、シャープールⅠ世（241～272年）のいわゆる「騎馬叙任式図摩崖浮彫」を描写したものである。

②ナグシェ・ロスタムおよびアケメネス朝ペルシア諸王墓遺構

また、「此後山ノ中腹ニ当時帝王ノ墳墓ニ所アリ」および「宮殿ノ趾ヲ隔テ南ニ値レル山麓ニ尚一墳墓アリ」とは、今日「慈悲の山」と呼称されるペルセポリス建築址群の背後に在るアケメネス朝ペルシア歴代王すなわちアルタクセルクセスⅡ世（紀元前404～359年）、アルタクセルクセスⅢ世（紀元前359～338年）、ダレイオスⅢ世（紀元前336～330年）の古墓遺跡を指す。さらに「前ニ説キタルタクテタウース北方ノ巖崖ニ在ル四墳墓」とは、今日の呼称「ホセ

イン山」の山麓に位置する「ナグシェ・ロスタム」に見られる岩肌を十字形に穿った摩崖王墓群を指す。すなわち遺跡に対峙して左方より、ダレイオスⅡ世（紀元前423～404年）、アルタクセルクセスⅠ世（紀元前465～424年）、ダレイオスⅠ世（紀元前522～486年）、クセルクセスⅠ世（紀元前486～465年）の歴代四王の古墓と比定されているものである。これらの王墓遺跡に関する観察記載については、吉田記との間に若干の齟齬があるが、これについてはなお検討を要するためここでは割愛する。

③ペルセポリス（タフテ・ジャムシード）

おそらく日本人初のペルセポリス（現地名タフテ・ジャムシード）訪問・実見について、吉田は「偉大なる古趾の眼中に入りたる爲め驚愕の心（吉田1894年）」を起こす。その観察眼は「人工の石殿は雲を貫き、高さ十六丈圓徑二丈四尺の石柱は三十有六基を存し（同前）」、「石壁上の圖畫は萬國來貢の圖最も觀るべし、弓矢を帶びたる者あり、楯矛を執りたる者あり、是に次で頭に布帛を捧げたる者あり、羊を捧げたる者あり、駱駝^{注1}を牽きたる者あり、牛を追ふたる者あり（同前）」と、遺跡の列柱やレリーフ像に細かく及ぶ。なかでも、石造物に刻まれた古代文字のひとつとして「ミハキー」（ペルシア語で「小釘」の意）に着目している点は注視すべきであろう。おそらくこの時同行の「ドイツの考古学会の探検員」からの解説により知り得たことではあろう。これは今日いうところの「楔形文字^{注2}」を指す。これについては同行の古川宣謨も「此宮殿ハザクセツ王^{注3}ノ時竣功シタリト云フ其銘現ニ石壁ニ存セリ（前記古川著）」と注意し、「之ヲ「ミハキ」（釘字ト云ヘル義）ト云フ解ス可ラス（古川1891年）」と8月13日付日誌中に、楔形文字の字形模写を含めて、興味深く描述したところがある。

注1 ラクダの浮彫り像についての古川による観察描写には、アケメネス朝ペルシアにその帝国としての広汎域にわたる国際性を見出す件がある：「駱駝ニ單峯アリ雙峯アリ原來單峯ノ駝ハ南地ニ産シ雙峯ノ駝ハ中部亞細亞ニ産ス故ニ此図ニ據レハ往昔四方ヨリ波斯ニ朝貢セシコト疑フ容レス（古川1891年、日誌之部8月13日付）」。

注2 既に、ローリンソン（H. C. Rawlinson、英、1810～95年）らによる楔形文字解読成功（1846 / 47年）は成し遂げられていたけれども、明治13年「遣波使節団」のもたらしたこの体験的ペルシア情報、ましてや楔形文字記録から蘇る西アジア古代文化の世界が、真に日本で受容されるには第二次大戦後の本格的現地調査研究を待たねばならないことを考慮すれば、ごく一部ながらも、その存在自体はやくに認知されていたことがわかる。

注3 ダレイオスⅠ世

④イスタフル遺跡

吉田のペルセポリス踏査録には「此近傍一望の荒原中に石柱石礎の處々に見ゆるは、「イスタクル」の都趾なり（吉田1894年）」とある。古川は同遺跡について「イスタハルト號スル古

蹟アリ是レ古代ノ都府ナリシカ回教人來襲セシヨリ屢、兵亂ヲ經遂ニ衰替シテ茫々タル原野ニ歸シタル者ナリト云フ（古川1891年、日誌之部8月13日付）」と記している。これは「城塞」の意（岡崎他訳1970年）といわれるアケメネス／サーサーン朝ペルシア、イスラーム期の複合都市遺跡イスタフルを指す（筆者が1990年9月6日に踏査した際の知見では、高さ2m、矩形プランの城壁址が残存し、多数散布する青釉、緑釉、多彩釉などのイスラーム陶器片は、そのほとんどが9～10世紀のものであった。さらには10～11世紀と考えられる中国の白磁片1点もあった）。

⑤パサルガダエ

ペルセポリス踏査の翌日8月14日、吉田の踏査遺跡に関する記録は、比較的簡略である：「カアマバアドより又一帯の山路に傍ふて濶然たる平原に出づれば、其路畔にはサイリユス王の墳墓^{註1}あり、其構造は宏大ならざるも、一人の埋葬所と見れば随分崇重なるものあり、白色玲瓏の大理石にて方形三十尺四面に築き立て、其高さ亦三十尺位なり（中略）左傍に見ゆる一丘山は半英里も隔たりならん、此丘の巔には巨大なる城趾^{註2}あり、石壁は數百尺の間に起伏し、蟠れる龍の如し（吉田1894年）」。

これは、ペルセポリス北東約40kmに位置するアケメネス朝ペルシア帝都遺跡のひとつパサルガダエの描述であり、下線部注1は造営者キュロスⅡ世（紀元前559～530年）の墓遺構（通称ガブレ・マダレ・ソレイマーン[ソロモン王母の墓]）、同注2は大基壇遺構（通称タフテ・マダレ・ソレイマーン[ソロモン王母の玉座]）をそれぞれさすものと読解される。

対して、古川の記録は、若干の私論を伴って細かい：「一巖山ヲ下り平地ニ出ツ此ニサイリユス王ノ墳墓アリ曠原中ニ屹立シ方六間高サ三間半許ニシテ五層に築造シタル白蠟石ノ壇ナリ壇上ニ又白蠟石ヲ以テ構造シタル石庫ノ如キ者アリ高二間方三間許内部ノ廣サ二間二間半許ニシテ上下皆各二片ノ大白蠟石ヲ以テ疊ミ四壁モ亦之ニ稱フタル厚キ大石ヲ以テ圍ミ棺槨ノ形ヲ見ス而シテ壇外周圍ノ地ニ大石柱ノ頽壞セル者多キヲ見ル是其景狀ノ大略ナリ然レドモ之ヲサイリユス王ノ墳墓ト稱スルハ大ニ疑ナキ能ハス何ト（欠字）レハサイリユス王ハ明治十三年ヨリ遡ル二千四百零九年即チ耶蘇紀元前五百廿九年ニ方リ裏海ノ東北方ニ國ヲ成シタルシーシアヲ攻メ戰敗レテ擒トナリ（後略）（古川1891年、日誌之部8月14日付）」。これは「ガブレ・マダレ・ソレイマーン」についてである。

また同日付記録後半に見える記載、すなわち「曠原中ニ古代石殿ノ頽壞シテ僅ニ其一隅ト基礎トヲ存セル者二三ヲ見ル是亦故宮ノ遺跡ナル可シ此ノ曠原ヲ過キテ一小山ヲ横キル山崖ヨリ山頂ニ亘リ一大臺アリ石ヲ疊ミテ之ヲ造ル是サイリユス王宮殿ノ蹟ナリト云フ（古川1891年、日誌之部8月14日付）」は「タフテ・マダレ・ソレイマーン」を指すと判断される。

むすびにかえて

吉田正春については、はやくより明治初期の「民権」運動家として名前が挙がるほか、たしかに『考古説畧』や『回疆探險波斯之旅』に関わって、その人物像が評価されてきたところはある。しかし、それぞれにおける事績のあいだに、何らかの紐帯があったのではないかということが探索されたことは、管窺のかぎり、これまでのところ見出しえない。吉田の事績は明治初期における日本の近代化動向の所産そのものであったであろうし、吉田が生きた時代は、将来多面化・専門化してそれぞれに分枝・発展する諸学問がいまだそれらの萌芽的状态にあって、かつ混在・未分化裡に胎動しはじめていたであろうことは推察される。

考古学に関しては、モースのあと坪井正五郎（1863～1913年。人類学者。江戸生れ。東大教授。日本の人類学の始祖。東京人類学会を創設、「人類学会雑誌」を創刊。日本石器時代住民についてコロポックル説を主唱。この件『広辞苑』第五版[岩波書店]に依る）らにより「人類学会」が創設されたのが1884年と比較的早かったものの、こと「西アジア」となればその学会活動は1917年の「バビロン学会」創設を待たねばならない（原田1918年）。

遣波使節団の抱えた商業目的的性格に関しては、吉田の同行者のひとり横山孫一郎が、明治6（1873）年創立の「大倉組」の社員として、はやくも明治8年ロンドン支店長に、同11年にはオーストリアに赴任し、国際感覚を身につけていたといわれることなどはさらに考慮すべき要素を含んでいると予測される（瀬川1893年）。

このたびは、筆者の専門分野である「考古学」「西アジア」双方に係わる視点から資料を拾い、吟味してみた。『考古説畧』（1879年）所収の吉田の緒言、「波斯紀行 番禺達都及番須羅紀行」（1881年）にみられるメソポタミア観察事項のいずれも、その発表年次が明治10年代前期と近代日本の黎明期ながら、今日にあってもなんら遜色のない資料性をなお有していることはある意味驚嘆に値する。緒言中に「余が行囊中の手帳に記載せし數項」より、当時在ったであろうことが推察される吉田の「フィールド・ノート」がいまに伝わらないことは惜しまれる。吉田の考古学上の先駆的聡明さ、西アジア踏査時における果敢さや観察の細やかさは、たしかに吉田個人の天賦の才・技量に帰すべきところが大きかったのかもしれない。しかし、吉田をはじめとする当時の先覚者たちの動向を多面から再吟味すれば、恐らくそれらはある意味当然のこととして判断・受容されるべき、そして特段驚くに値しないのかもしれない。すなわち、少なくとも「考古学」分野には、未だ知られざる、先覚者の多才ぶりを顕示する事績が、単に埋れたままになっていることに起因しているだけなのかもしれない、と危惧されるのである。ここに、社会動向との係属性に主眼を置く学史研究の再必要性を筆者は痛感するのである。

（図1の吉田正春肖像は、ご遺族のひとり吉田道乃氏より筆者が譲り受けた葉書様の印刷物による。正春本人が生前甚く気に入り、何人かに配ったうちの一枚との由。図2は筆者自身の撮影による。図3および図4は九州大学図書館蔵書による。図5は中近東文化センター三笠宮記

念図書館蔵書による。なお、引用文等において、旧字、新字および異体字を敢えて混用したところがあることをお断りしたい。）

【参考文献】

- 飯尾都人（訳）1994年、ストラボン（著）『ギリシア・ローマ世界地誌』、龍溪書舎。
- 磯野直秀 1987年、『モースその日その日—ある御雇教師と近代日本—』、有隣堂。
- 大津忠彦 1998年、「ギーラーンを訪れた日本人先覚者たち」、『ギーラーン—緑なすもう一つのイラン—』、中近東文化センター、49～56頁。
- 1999年、「付記、明治13年ペルシア訪問団員について」、『chashm』no. 83、日本イラン協会、28～34頁。
- 岡崎敬・糸賀昌昭・岡崎正孝（訳） 1970年、ロマン・ギルシュマン（著）『イランの古代文化』、平凡社。
- 近藤義郎・佐原真（編訳） 1983年、『大森貝塚—付 関連史料—』（岩波文庫）、岩波書店。
- 瀬川光行（編著）1893年（1978年復刻）、「横山孫一郎君傳」、『商海英傑傳』、三益社印刷部、8ノ46～52頁。
- 田保橋潔 1923年、「創業時代に於ける明治政府の對波斯交渉—古川大尉の「波斯紀行」を読む—」、『史學雜誌』第34編第10号、史學會、72～84頁。
- 中岡三益 1985年、「外務省御用掛吉田正春波斯渡航一件」、『三笠宮殿下古稀記念 オリエント学論集』、日本オリエント学会、小学館、221～233頁。
- 萩原延寿 1967年、「二つの墓碑銘—真辺戒作と吉田正春—」、『土佐史談』第118号、土佐史談会、56～57頁。
- 原田敬吾 1918年、「バビロン學會の設立」、『考古学雜誌』第8巻第7号、考古學會、63頁。
- 古川宣誉 1891年、『波斯紀行 完』参謀本部。
- 山中由里子 1993年、「明治日本人のペルシア体験—吉田正春使節団を中心に」、『比較文学』第35巻、日本比較文学会、117～128頁。
- 吉田正春 1881年、「波斯紀行 番禺達都及番須羅紀行」、『東京地學協會報告』第3巻第4号、東京地學協會、169～190頁。
- 1894年、『回疆探險波斯之旅』、博文館。

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授 ohtsu@chikushi-u.ac.jp）